

愛媛県東温市三軒屋窯陶磁片調査報告

第1章 はじめに

今治に職を得て居住していた平成27(2015)年5月27日、東温市教育委員会の御厚意で、愛媛県東温市窯跡関連陶磁器資料(三軒屋、則之内、志津川)を実見し概要を確認。同年6月9日から12月16日までの間、何度か同教委に出向き、全資料の熟覧・登録、主要資料の実測・写真撮影を実施した。

翌年、退職し、帰省したため整理調査が滞っていたが、三窯跡関連資料の内、旧温泉郡川内町(現東温市)松瀬川字三軒屋に所在した近世～近代窯跡「三軒屋窯関連資料」については、令和元(2019)年度から実測図と遺物写真の整理を始め、その後、ドローイング工房クラフトマンにデジタルトレースとデジタル合成を行い、プレートの作成、原稿執筆を経て、令和5(2022)年3月31日ようやくレポートの完成にこぎつけた。

第2章 三軒屋窯の先行研究

第1節 永田正章氏の論考

数少ない同窯の研究書が、永田正章氏「伊予の陶芸(四)松瀬川焼研究」『愛媛の文化第四号』(愛媛県文化財保護協会 昭和四十一年七月三十一日)と「伊予の陶芸(五)松瀬川焼研究その二」『愛媛の文化第四号』(愛媛県文化財保護協会 昭和四十二年三月二十五日)の報告2編である。

永田氏は、窯跡、工房跡、関連施設を現地に訪ね、窯跡に関連した人々からの聞き取り、窯跡出土品、伝世品、古文書、墓誌、関連文献の調査を行う等、大変な努力を重ね作成した報告の要旨を以下で記したい。

① 三軒屋窯の現状

登窯遺構は温泉郡川内町(現東温市)松瀬川(ませかわ)字三軒屋のバス道路(現県道327号)西側に(昭和41年6月16日時点)において、当時のままに残存しており、窯跡側壁の燃料投入口には「伊予ボール」(砥部で明治20年代から盛んに焼成した南洋向けの輸出磁器茶碗)の破片が熔着していた。

道路を挟んで下側のミカン畑に作業場があった模様で、道路に面した石垣にも石に混じって窯の内壁の大きな破片やトンバリ、シノ、手もの(蛸足ハマ)が積まれていた。

② 往時の三軒屋窯

大野伝次翁は明治4年松瀬川生まれで松山在住、聞き取り時(昭和41年6月)の年齢94歳、幼少期は窯で遊び、ロクロ職人とも仲良しだったということで、証言の信用性が高い。主な記憶として、

- ・明治初年、永寿橋のたもと(渡辺武雄氏宅前)に飲食店を兼ねた旅籠があったが、製陶職たちは旅籠ではなく合宿所で寝泊まりしていた。
 - ・4室から5室ある登窯1基、素焼窯1基があり、燃料は良質の松材を使っていた。職人は何十人もいて、窯の南方に作業場には「ケリロクロ」が十数台あった。窯下手の川筋に水車と水簸場があった。
 - ・絵付けは、ほとんど型文様仕上げで、翁が家を出た15、6歳頃(明治20年前後)には廃窯していた。
- などがあり、別人の伝聞として、
- ・渡部武雄氏所有の畑地内に窯があり、同氏の住宅前の旅籠に職人たちが下宿していたらしい。絵付け職人が砥部から来ていて、現在の橋本規久氏所有地内の建物(今は無住)に住んでいた。
 - ・三軒屋窯では、原料は純度の高い磁器原料で、染付用のゴスも最上の品を使っていた。陶石をどこから採ったか明らかでないが、砥部からも補充していた。
 - ・廃窯後は天井が落ちた窯の残骸が残っていて、永寿橋下手近くに水車小屋もあった。
- などの聞き取りもある。

③三軒屋窯の窯主(渡部歌次)のこと

- ・三軒屋を開発したと推定される「渡部三家」の本家筋に文政十一年戊子年七月十六日、渡部歌次(佐太郎)が生まれた、足が跛行であり、他所で製陶の修業をした。
- ・元は佐太郎と名のっていたが、明治に入り歌次に改名した。明治初年から七年頃までは、隣村の「則之内窯」に行き仕事をした。そのことは、
「明治七戌造 則之内ニ而 松三ノウタニ」(松三ノウタニ=松瀬川の歌次) 銘の「則之内焼金毘羅宮奉納神酒瓶」
が残っていることから分かる。
- ・子供は久太郎(久次)といい、向井愛山に従って広島で修業し砥部に移った。
- ・歌次夫妻の墓は三軒屋の本家跡の裏山にある。

④三軒屋窯の稼働時期

済川善四郎氏(松瀬川小学校校長)は、

- ・「同窯は安政年間から明治 16、7 年(1854 年頃～1883 年頃)まで稼働した」

と推定している。

永田政章氏は、

- ・三軒屋窯では、「嘉永七年(1854)の年号在銘船徳利」「同年銘茶壺」が作られ、大野伝次翁が 15、6 歳で家を出た頃(明治 20 年前後)には廃窯していたことから済川説は裏付けられることになるが「伊予ボール」の出土、窯壁付着状況から考えて、焼成年代の最下限は明治 20 年代とするのがよいのではないか。
- ・「嘉永七年銘の二器」は染付磁器として器型、絵付、釉調すべて最高の出来上がりで、こうした秀作は優秀な職人を揃えたにしても一朝一夕に突如として焼きあがるものではない「同二器」の製作水準に達するまでは開窯後最低 5 年ぐらい準備期間を置かねばならないことから、嘉永七年を「同窯質面での最盛期」であるとすると、稼働時期は少なくとも嘉永の初めから明治 20 年前後の 35 年以上にわたって稼働していた。
- ・慶応 2 年(1866)2 代目久次が生まれるが、この頃が松瀬川焼の最盛期であった。
- ・明治初年、歌次は、再興された須ノ内(則之内)八幡下の窯で作業に従事したが、廃藩による藩札下落に起因する不景気のため、明治 7・8 年頃廃窯したようで、松瀬川に戻った。
- ・明治 19 年以降、三好照治が三軒屋に窯を築き、白瀉秀三郎が同窯を経営し、印判手をつくる。歌次父子は明治 19 年に三軒屋を去って砥部に移り、歌次は明治二十四年 享年 63 歳で亡くなった。

⑤主な伝世資料

- ・染付南画山水密画船徳利 (伊予の陶芸 4) (現在久万美術館蔵)

高 18.7 cm、径 19.2 cm 頸部に環有り。高台内に

「嘉永七寅年 イヨ松山久米郡 松瀬河村 三軒屋 渡部佐太郎」

の銘がある。(嘉永七寅年=1854 年)

- ・染付茶壺 (伊予の陶芸 4)

高さ約 20 cm、径 15 cm で蓋が付いている。

「嘉永寅七年 三軒屋 渡部左太良 福寿 (書き判)」

の銘がある。

- ・染付山水文手描き大徳利 (伊予の陶芸 4)

三升徳利で絵の裏に大きく「今井姓」文字がある。大野伝次氏によると今井氏は代々松瀬川村三軒屋材有力者であった。

・染付八角銘々皿十人前 (伊予の陶芸 4)

内面見込は三津浜港から興居島を望んだ絵、口縁端部は雷文を描く。

箱蓋の表書きに「安政六未年三月吉日求之」と記され、

とあり、表面左下脇の削って書き直したところに

「寺田又兵衛」

の銘、裏面に

「宝物八角皿 川上戎屋 十人前在」

の銘あり。(安政六未年=1859年)

・染付安政記銘茶入れ (伊予の陶芸 5)

高さ7cmで山水画を描く。裏面に

「安政三辰年 三軒屋 渡部氏」

の銘がある。

・民窯松瀬川の作品

染付山水の丸碗、汲上げ茶碗、飯茶碗、銚子徳利二つの内一つには渡部家の家紋が描かれている。

第2節 吉田忠明氏の論考

吉田忠明氏著の『愛媛の焼き物』財団法人愛媛文華館 平成7年7月では、永田政章氏の論考が、分かりやすく要約されていて、窯跡及び周辺の写真、採集した染付片の写真「嘉永七寅年 イヨ松山久米郡 松瀬河村 三軒屋 渡部佐太郎」銘の染付南画山水密画船徳利(現在久万美術館蔵)の写真も掲載されている。

第3章 三軒屋窯採集遺物

第1節 はじめに

東温市教育委員会に保管されている「三軒屋窯関連資料」は、整理コンテナ8箱に収められている。

コンテナラベルに「三軒屋焼窯採集 971006 川内町教委 担当者2名」と記されたものが6箱(資料点数75点)あり、窯道具と陶磁片が収納されている。以下(19971006 採集品)と略。

コンテナラベルに「則之内焼 三軒屋焼 製品」と記された1箱は、三軒屋窯の「伝世品資料」8点と「則之内焼伝世資料」が収納されている。以下(伝製品)と略。

コンテナラベルに「松三1 川内町松瀬川 27点 松瀬川焼 三軒屋窯 磁器01~14, 土器01.02 窯道具01~11」と記された1箱の資料点数は27点、展示か調査用にピックアップされた資料の可能性はある。以下(松三1)と略。

これらは、公的機関(東温市教委)に保管される貴重な公有財産であり、今後、科学的な発掘調査により取上げられた出土地点の明確な資料が公開されるまでは、当該窯の性格を物語る唯一の存在である。

ただ、6箱については「採集日」が記載されているが、2箱「採集日」の記載のないなどその取扱いは注意が必要である。

当該資料は整理用コンテナでは3群(19971006 採集品)(伝製品)(松三1)に種別は自身が「窯道具」「陶器」「磁器(採集品、伝世品)」に分けたので順を追って報告して行きたい。

第2節 19971006 採集品

①窯道具(採集資料 1-1~7-63)

・ツク(1-1~4-1)

図版1-1(以下1-1と略)~1-4-1はツクである。

1、2 はハマと柱部を別に作りに上下端にハマを逆位に接着させて成型する(分割成型技法)註1で作成される。柱部の中位がエンタシス状に膨らむ特徴があり、愛南町御荘焼長月窯、砥部町大下田窯のツクは同じ技法で成形される。

3～4-1 は半裁竹管に布を敷き、粘土を押込んで型取りし、平面を張り合わせ、両端部は手で押し広げて成型する(型作り成型技法)註2で、今治市末廣窯のツクが同じ技法で作られている。

一つの窯出土のツクに二種の製作技法が見られるのは珍しいが、2種の口(上)径は10.0～11.0cmと近似している。ツクの用途は(「製品」や「シノ」等を載せる)「蛸足ハマ」を「下支えする柱」の役割の他に製品を載せる台としての用途(3,4)もある。

・トチン(1-5～2-9-1)

型作り成型法で作られる。継目は分かりにくい。上面に高台痕がある。6は分割成型技法で作られる。中位がエンタシス状に膨らむ。2-7～9は分割成型技法で作成され、7は上端部に高台痕がある。9-1は小型のトチンで下端部に砂が付着していることから窯床に直接置かれていたものとあるより、思われる。

・蛸足ハマ(2-10～5-19)

蛸足ハマは全て4足で、最大長(足先から反対側の足先までの長さ)も21.7cmから23.0cmとほぼ同じ大きさである。何れも、底部中央が小ドーム状の窪みがあり、脚は4本である。

製作技法は、

- ・型に布を敷く→粘土を押込む→布をもって引上げ、型から外す→底部縁辺部を篋で削って平らにする。
→脚部の下部を篋で削って形を整える→乾燥させる

という手順で、「脚部と体部の下部」と「底部中央の凹部」に成型時の布目痕が残る。

型に布を敷いて粘土を押込み成型する技法は瓦作りの技法と共通している。

法量は、11は脚長は6.7cm、高さ2.8cmと小振りである。10、12、13は脚長は7.7～8.0cm、高さは3.2～3.8cmで大きさが近似しており、高さが低く平たい印象がある。14～19は脚長が8.2～8.9cm、高さが5.0～5.7cm大きく、高さも高い。しかし、用途の違いを思わせる程大きな差ではない。

・シノ(5-20～6-28)

シノは上に製品を置く台の役割があり、窯床に直接置いたり、蛸足ハマの上に載せて使用される。作成方法はまず脚部を作り、上端部を抑えて広げ、脚部下端からヘラを差し込み回転させて中心部の粘土を取去り、器壁を薄くする。

20・21は口径は1.0cm程度の差があるが、高さは10cm程度と似ている。22は染付片が熔着しているので、上に同器が載っていたようである。両方とも上下端にアルミナ状の泥が付着していることから、上部にハマか円盤を置き製品を据えたものと考えられる。

22・23は底径が7.6、8.9cm、高さが7.0cm程度、5.6cmと20、21に比べると小型である。22は上端に窯道具片が熔着し、外面には縞模様のある染付片が熔着している。上に載っていた器がへたって熔着したようである。

23は下端にアルミナ状泥が付着している。上端が火を受けていないことからハマか円盤が載っていたことが分かる。

6-24～25は前者に比べて脚が11cm程度と高く、細長い器形である。24は上端部が火を受けていないので、ハマか円盤が載っていたと思われる。外面に染付片と十分熔けていない釉薬が熔着している。25は上下端とも火を受けているので窯内で倒れていたかもしれない。26は外面に染付片が熔着している。

・大型ハマ(6-27)

1点だけ採集されている。口径が11.6cmあり、上部にアルミナ状の泥が塗られる。

・大型円盤(6-28・29)

両方とも口径が8.2cmあり、28は上面に染付花瓶底部が熔着する。また窯床に直に置かれていたようで、下面には砂が多く付着している。29は上面に径6.5cmの高台痕があり、磁器の高台片が熔着している。

・円盤(6-30~35)

6点のうち30、31は口径7cm以上あるが、上下面に高台痕がない。32は口径が6.6cmで上面がやや盛り上がっていて、上面に径5.7cmの高台痕がある。33、34は高台痕があるが判別しにくい。35は口径が4.6cmと特に小さく、上面に4.0cmの高台痕がある。

・ハマ(7-36~60)

ハマは窯内で焼成する時製品を載せる台として用いられる。形状は、台にあたる「ツク」や「蛸脚ハマ」から剥がしやすいように断面逆台形で底部中央部が窪む碁笥底状を呈する。

36~40は口径が7.0~8.4cmと大きく、上部に残る高台痕も5.45~6.2cmと大きめの容器が載っており、40の上部には染付碗の破片が熔着している。41~45、51は口径が6.7~6.0cmで、上部に載る容器も高台径が3.3~4.2cmと前者に比べると小型である。46~50、52~59の口径は4.9~5.9cmとさらに小さいが、上部の高台痕は3.4~5.7cmとあまり変わらない。60は白磁質のハマで上面に径4.0cmの高台痕があり、下面には熔着痕がある。

・脚付ハマ(7-61、62)

61は上下面に成型時の糸切魂があり、上面にはアルミナ状の泥が塗られ、径3.6cmの高台痕がある。下面には4本の脚が付けられる。62も上下面に成型時の糸切痕があり、上面にはアルミナ状の泥が塗られ、径3.86cmの高台痕があり、下面には3本の脚がつけられる。

・窯壁(7-63)

63は一面はよく熔けてガラス化している。

② 製品(採集資料 8-1~9-34)

・染付碗(8-1~21、19-22)

1は外面に圏線、草花文を描く。焼成が悪く、釉が熔けていない。形も歪んでいる。2は、外面圏線、二重網目、染付片が熔着している。焼成が悪く、歪んでいる。3は口径9.8cm外面は斜格子文、内面圏線が描かれている。焼成は良好で、釉もよく熔けている。4は外面に稲束文、内面圏線が描かれ、焼成は良好で、釉もよく熔けている。5は底部のみが遺存している。外面草花文、内面圏線と見込に「岩波」銘がある。焼成は良好で、釉もよく熔けている。6は内外面圏線を描き、見込には「蝶」銘がある。焼成は良好で、釉もよく熔けているが、形は歪んでいる。7は内外面圏線、見込には崩れた「岩波」銘がある。外面には蝶と草花文を描き、底部に窯道具が熔着している。形はひどくゆがんでへたっている。8は内外面に圏線があり、見込には蝶の銘がある。9は内外面圏線、見込は崩れた蝶文、外面には草花文が描かれる。10は底部のみの遺存で、見込は岩波文、外面圏線が描かれる。形は歪んで、へたっている。11は内面圏線、見込は「岩波」銘、窯道具片が熔着する。外面は山水文、底部に径5.2cm、厚さ0.4cmの円盤が熔着していて、形は歪んでへたっている。12は内面圏線、型紙摺りの藤文、外面圏線、高台内露胎中心部施釉。13は内面圏線、外面水車、山水文。14は内面圏線、外面、山、松、帆掛舟を描く。形はひどく歪んでへたっている。15は内面圏線、外面浦の苫屋文を描く。16は内面圏線、外面は水車と草花文が描かれる。17の外面は芙蓉手状に区切られていて区画には富士や草花文が描かれる。18は焼成は不良で釉が熔けていない。19は内面圏線、外面口縁端部多重圏線、松

文が描かれる。口縁端部が歪んで曲がっている。20 は内面圏線、外面稲束文が描かれる。21 は内面草花文、外面圏線が描かれ、窯道具片が熔着している。9-22 は染付碗小片である。8 点ある。

・染付広東碗(9-23)

23 は内面圏線、見込に「崩れた岩波」銘があり、外面は浦の苫屋文が描かれる。窯道具片が熔着している。形はひどく歪んでへたっている。

・白磁皿(9-24~26)

24 は底部内面に蛇目状釉剥ぎがあり。そこに重ね焼きの高台片が熔着している。外面にも製品が熔着。25 は底部内面に蛇目状釉剥ぎがありそこに重ね焼きした器の高台片が熔着している。26 は底部内面に蛇目状釉剥ぎがあり。そこ重ね焼き器の高台片が熔着している。

・染付大皿(27・29)

27 は底部の小片であるので、推定底径を出すには無理があるが、大型の皿である可能性が高い。高台内蛇目釉剥ぎがあり、全体に釉が厚くかかっている。29 は口縁部の内面口縁端部に圏線に囲まれた雷文帯があり、外面は波に竜文が描かれる。文様は緻密で丁寧に描かれる。

・白磁大皿(9-28)

底部の小片のため、底径を推定するには無理があるが、大型の皿である可能性は高い。高台内はやや碁筈底状で高台内に施釉している。

・染付蓋(9-30)

合子の蓋で上部はドーム状になる。外面に笹文が描かれる。焼成は不良で釉はよく熔けていない。

・染付小片(9-31)

碗の口縁と思われる小片で内面に圏線、外面に浦の苫屋文が描かれる。ひどく歪んでいる。

・陶器鉢(9-32)

陶器鉢の底部である。焼成は不良で釉がよく熔けていない。

・陶器土瓶(9-33)

外面と頸部内面を施釉する。外面に弦を支える孔の開いた把手を貼り付ける。

・陶器甕口縁(9-34)

無頸甕の口縁である。端部は施釉されていない。形は歪みがあり、へたっている。

第3節 製品(伝世資料 10-35~42)

・型紙刷染付端反碗(10-35~37)

35 の内面、口縁端部瓔珞文、圏線、見込花輪文、外面大きな瓔珞文、「隠れ蓑、隠れ傘、打出の小槌」の3文様一単位で3単位が口縁を巡るが、文様最後の重なりで小槌文様1か所が重なっている。36 は内面口縁端部瓔珞文、圏線、見込崩れた花輪文、外面は「白抜き中の宝珠文、石畳文」の2文様が一単位で3単位が口縁を回るが、宝珠文が石畳文に重なり、石畳文の一部が消えている。37 は口縁端部瓔珞文、圏線、見込崩れた花輪文、外面は「扇文、格子文」の2文様が一単位で、3単位口縁を巡るが、文様は最後まで重なることなくきちんとつながっている。

・型紙摺染付丸碗(10-38)

内面は口縁端部青海波文、圏線、見込崩れた花輪文、外面は「毘沙門亀甲文と花文」2連一単位が3単位口縁を巡る。文様の最後もきちんとつながっている。

・型紙摺染付小皿(10-39~41)

39~41 の3点は法量・文様がほぼ同じで、十客揃の組物としてつくられたものであろう。内面は「渦、花

文」が描かれる。

・型紙摺染付稷花皿(10-42)

口縁端部は呉須で縁取られていて、稷花を呈する。内面は花文を描いた団扇状の窓(女郎花、萩、藤袴)があり、外面は花唐草(一巡3単位)、底部は蛇目状釉剥中心部に「三軒屋焼」の墨書、露胎部に「三軒屋焼 森氏 二ケ口 昭和二十六年十二月寄贈」の墨書がある。

第4節 (松三1 採集資料 11-1~12-11)

① 窯道具

・蛸足ハマ(11-1~12-4)

1は5足ある最大長(A-A'を脚の付根まで延長)は20.3cm、足長は8.4cmで、脚部下面と下面中心の凹部に成型時の布目が残る。中心上面・下面に7.7cmの重ね焼き痕が有る。脚部上部の円盤の上に染付製品が熔着している、上面脚端部にハマか円盤の痕が有り。底部はツクと重ねたためか、凹部以外焼成痕がない。表面に光沢がある。2は6足の蛸足ハマであるが、2脚が欠損している。脚部下面と下面中心の凹部に成型時の布目が残る。中心部上面に径7.6cm、中心部下面に径7.8cmの重ね焼きの痕が有る。脚端部に径5.5cmの重ね焼き痕が有る。12-3は5足の蛸足ハマで、脚部下面と下面中心の凹部に成型時の布目が残る。中心上面に10.0cm、中心下面に11.0cm、脚端部上面に径5.0cmの重ね焼きの痕有り。上面に「三軒屋唐津山にて拾う 昭和二十七年 渡部・」の墨書あり。4は脚部の小片である。上面の脚先に3.7cmの重ね焼きの痕有り。「三」のマーキング有り。

・シノ(12-5、6)

5は脚部内面へラ削りあり。上部はアルミナ状の泥付着。6は上部にアルミナ状の泥が付く。脚部は中実である。片方の端部が欠損している。

・ハマ(12-7~9)

7は底部に成型時の布痕、上面に糸切痕が残る。上面にアルミナ状の泥を塗り、径4.2cmの高台痕が付く。8は上面に糸切痕残り、アルミナ状の泥を塗る。9は底部に成型時の布痕、上面にアルミナ状の泥を塗る。径4.2cmの高台痕が付く。

・円盤(12-11、12)

10は上面に3.3cm、11は上面に4.5cmの高台痕が残る。

② 製品

・染付碗(13-1~5、8、9)

1は内面は圏線と中央に簡略化された帆船が描かれる。外面は圏線、草花文、染付口縁片が着している。2は内面は圏線、見込銘の判別は不明、外面は草花文が描かれる。全体に歪みがあり、染付片が複数熔着している。3は内面圏線、見込崩れた千鳥文、外面は圏線、水辺文が描かれる。4は内面圏線、見込崩れた蝶文が描かれ脚付きハマの脚2本が熔着している、外面は圏線、水車の退化した文様が描かれる。5の内面は染付片3点が重なり合って熔着している。外面は圏線、水辺文が描かれる。8は底部のみの遺存で全体の模様は分からないが、内面圏線、見込崩れた千鳥文、外面は圏線、水辺文が描かれる。9は、内面圏線、見込崩れた千鳥文、外面は圏線、水辺文が描かれる。

・染付型紙摺碗(13-6)

セットになる同じ文様の型紙摺染付碗が上部に熔着している。蓋の口縁端部内面は瓔珞文、見込は花輪文、外面高台脇は連弁、体部は草花文で染付小片が付着している

・型紙摺染付碗小片(13-10~12)

何れも小片である。

・染付碗小片(13-13・14)

13は内面圏線、外面草花文が描かれる。

・陶器鉢(13-15・16)

底部と体部片で何れも内面には成型時の櫛目が付く。

第4章 おわりに

①窯道具

ツクは分割成型技法(ハマと柱部を別に作りに上下端にハマを逆位に接着させて成型する)と、型作り成型技法(半裁竹管に布を敷き、粘土を押込んで型取りし、平面を張り合わせ、両端部は手で押し広げて成型する)が混在している。

前者は愛南町御荘焼長月窯、砥部町大下田窯、後者は今治市末廣山窯で採集されており、三軒屋窯で混在しているが、その理由は資料が少ないこともあり判然としない。

ハマはいずれも逆台形の形状で、上部に高台痕が付くものが多い。足付ハマは2点ある。

三軒家窯の稼働時期と推定される嘉永年間(1850年代頃)から明治20年代(1880年代頃)に近似する時期の県内窯(愛南町御荘焼長月窯、今治市末廣山、西条市川根窯)も同種の窯道具を用いている。

③ 製品

染付の意匠は、自然呉須のものには網目(8-3)、稲束(8-4、20)、浦の苫屋(9-23、31)、酸化コバルトのものには水車(8-13)、柳(13-5)が見られ、わずかではあるが型紙摺製品(8-12)もある。

三軒家窯開窯時(1850年代頃)の製品には天然呉須が使われていたようだが、明治8年(1875)に砥部にもたらされた西洋(酸化)コバルト、明治11年(1878)頃に導入された型紙摺技法が、その後三軒家窯に伝わり同技法によって生産された製品も採集されている。(註3)

三軒家窯跡採集資料と伝世品型紙摺染付の県内窯跡採集資料との比較は、東温市内、愛南町内の窯跡採集資料報告がすべて終わった時点で行いたい。

註

註1 稲垣正宏 「今治市末廣山窯跡」採集陶磁変報告 『喉郷雑記』 昔の調査成果・今の調査成果所収

註2 同上

註3 ワグネル(Gottfried Wagner)明治元年(1868)に来朝、明治三年(1870)佐賀藩に招聘され、白川御山方会所で石炭焼試験を実施、酸化コバルト希釈法の実用化を完成させる。明治7年(1874)10月大阪の絵具屋に売り渡され瀬戸地方にも普及した。

寺内信一著「有田陶磁史」昭和八年二月二十五日『陶器全集 第一巻』所収 昭和五十一年五月十日 発行所 株式会社 思文閣
石岡ひとみ「近世砥部焼磁器碗に関する基礎的研究—上原窯跡採集資料を中心として—」『研究紀要 第12号』愛媛県歴史文化博物館 2007